

歌人から小説家へ —— 尹紫遠の“戦後文学”

宋 恵媛 (大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター)

はじめに

暖かき春陽てれどもわが部屋のたたみの上に
置かげうすし

(尹徳祚『月陰山』河北書房、1942年、108頁)

骨肉はいづべの土に果つるとも吾がたましひ
は新羅にかへらむ

(同上、105頁)

尹紫遠(本名: 尹徳祚^{ユンデクチョ}、1910-1964年)は、朝鮮人としてはじめて和歌集を公刊した人物である。戦後は一転して、小説家として生計を立てようとした。だが、1950年に長編『三十八度線』を刊行したのみで、日本の商業文芸誌に作品を掲載することもままならなかった。この作家の創作活動の全貌を知ること、長い間困難だった。しかし近年、長男の尹泰玄氏が所蔵していた日記〔1948、1950、1954年分は欠〕、写真、録音資料の存在が明らかになり、状況が一変した。

筆者はすでに別稿でこの日記の分析を行った(「尹紫遠日記を読む：戦後日本で在日朝鮮人が書くということ」『アジア太平洋レビュー』第17号、2020年11月)。本稿では、歌人から小説家へと変貌した尹紫遠の戦後の歩みを、この日記を手がかりにして描いていきたい。

〈 〉内は日記が書かれた日付を、〔 〕内は筆者注を示す。

1. 日本敗戦1年後からの創作活動の歩み

六人兄弟の四男として慶尚南道の蔚山^{ウルサン}で生まれた尹紫遠は、横浜に住む長兄を頼って1924年に単身、日本へ渡った。長い間東京で一人暮らしをし、20代後半の時に短歌に出合う。その数年

後、故郷近くで兄弟たちと16年ぶりに再会。その前後の鬱屈した自らの感情を表現するため作句に没頭し、1942年に歌集『月陰山』を刊行するに至った。

だが、1946年晩夏に朝鮮から東京へと舞い戻った後は、短歌を詠むことはなかった。「創作慾」(1946.11.12, 1946.12.1, 1952.5.17)に駆られた尹紫遠は、それに代わる表現手段としてまず詩を選んだ。東京に到着して1か月も経たないうちに最初の詩「焼け跡」を書き、すぐに検閲係として勤務することになる朝鮮国際タイムス社発行の『国際タイムス』に寄稿した(1946.9.27)。翌年4月には、『民主朝鮮』第9号にほぼ同内容の詩「焼跡」が転載された。それまでの『国際タイムス』紙上での随筆等の署名記事では、本名である尹徳祚^{ユンデクチョ}の名が使用されたが、ここで初めて「尹紫遠」という筆名が使われた。この詩は、米軍の統治する東京で、日本人という「借着」〔日記では「古着」〕を脱いだ解放感を味わいつつも、朝鮮人同胞たちの相変わらずの惨めな生活ぶりに暗い予感を覚える、という内容の作品である。

二番目の詩は、「大同江」(『民主朝鮮』第8号、1947年2月)である。凍てついた大同江が春の訪れにより動き出すさまを、新たな時代の幕開けの象徴として描いた詩である。日本在住の朝鮮人が目にするはずもない、植民地解放〔以下、「解放」と略記〕後の北朝鮮の様子が描かれている点が目を引く。

この詩以降、尹紫遠は小説の執筆に専念した。最初に書いた小説は「思ひ出」〔未発表〕である。『国際タイムス』に掲載予定だったが、編集局長の高成浩に却下された。「思ひ出」掲載問題で喧嘩する。以後は文化面の原稿も一切局長が見ることになった(1946.11.16)という日記の記述からは、かなり深刻な対立が起きたこと

がわかるが、争いの原因は不明である。

「思ひ出」の脱稿当日、尹紫遠は次の作品「海王館」〔未発表〕に取りかかった。「釜山の旅館」取材。取りも直さず成守兄と僕の心の闘争を小説化〈1946.11.12〉した作品である。この長兄は「解放」直後に実際に旅館経営をしていたようで、後年の小説「密航者の群」にもそのエピソードが使われている。『民主朝鮮』1947年6月号から「海王館」の連載を始める約束が、知り合って間もなかった金達寿との間で交わされたが〈1947.2.17〉、書き上げられなかったようである。

代わりに着手したのは、「終戦当時の兼二浦」〔未発表〕だった〈1946.12.6〉。題名となっている兼二浦〔現在の朝鮮民主主義人民共和国黄海北道松林市〕は、日本製鐵が経営する朝鮮最大の製鉄所があった場所である。先に働きに来ていた兄を頼り、1944年に尹紫遠は最初の妻とともに同地に移住していた。この作品はその後「南北線」〔未発表〕〈1947.2.27〉、「国境」〔未発表〕〈1947.5.1〉と改題を重ね、最終的に「三十八度線」として完成したとみられる。「三十八度線」の原稿を読んだ保高德蔵は、「劃期的作品、一気に読ませる」と本人に伝え〈1947.8.7〉、尹紫遠を金史良や青木洪〔洪鐘羽〕らに連なる、有望な朝鮮人作家として評価する文章も書いている（保高德蔵「民族的悲歌」『朝鮮文藝』1948年2月）。その保高からの改題の勧めに従い、尹紫遠は「道は平原に連なる」という代替案も考えたが〈1949.9.8〉、最終的には「三十八度線」という題名に落ち着いた。なお、金達寿は「三十八度線」を酷評したようである。日記によれば、『朝鮮文藝』創刊祝賀会の席で、金達寿は「小説でもなければ、^{ミヤ}記行文でもないと言った。又、尹紫遠は朝鮮文学者の会員の資格がないとまで言った」という〈1947.10.9〉。『朝鮮文藝』は朴三文編、朝鮮文藝社発行で、寄稿者は『民主朝鮮』のそれとほぼ重なっていた。

続けて尹紫遠は短編「嵐」を書き、『朝鮮文藝』創刊号（1947.10）に寄稿した。1945年秋に日本から南朝鮮へと引揚げた朝鮮人一家の、悲惨な末路を描いた小説である。これは活字化された尹紫遠の初めての小説であり、生まれて初めてとなる原稿料1200円を受け取っている〈1947.8.19〉。

冷戦対立の深刻化に呼応し、1947年後半以降、

GHQ/SCAPおよび日本政府による在日朝鮮人団体への弾圧が本格化した。それにより、同胞が経営する学校やメディアで働いていた作家や作家志望者たちも職を失うことになる。尹紫遠が勤務していた朝鮮国際タイムス社も、1948年に経営難に陥った。日本人と朝鮮人両方の読者を対象とした『国際タイムス』は、新興夕刊紙として順調に経営を行っており、発行部数10万部を誇っていた。しかし、GHQ/SCAP当局から容共的とみなされて様々な制限が課され、また日本政府による既存大手新聞の優遇策である「購読調整」の影響を受けた結果、創刊から5年もせずに廃刊に追い込まれた。失業した尹紫遠はしばらく行商などをして糊口を凌いだ、その後は旧知のクリーニング店での仕事を掛け持ちしながら、日本の文芸誌への作品掲載を目指すことになる。1949年頃には「李成去〔桂?〕」〔未発表〕という作品を『群像』へ寄稿したが、関係者の間をたらい回しにされた挙句、四年後に差し戻された〈1953.1.22〉。

『三十八度線』が劇作家の三好十郎の仲立ちで早川書房から刊行されたのは、朝鮮戦争勃発から5か月後の1950年11月のことだった。当時、米軍による南朝鮮および日本の情報統制によって関連情報が少なかったことが、同書刊行の追い風になったとみられる。なお尹泰玄氏によると、「尹紫遠」というペンネームの名付け親は三好その人だという。

翌年1951年には、日本社会党出版部発行の『社会文藝』に請われ、朝鮮戦争を背景にした短編「密告者」を書いた。同誌に尹紫遠を紹介したのは、『三十八度線』の書評が縁で知り合った評論家の小松清だった。尹紫遠は「正式に小説の依頼をうけたのは、実にこれが初めてである」と、その時の喜びを日記に書きつけている〈1951.2.23〉。短編を書き終えた尹紫遠は、三好十郎に作品の出来について意見を求めた。三好は作品を評価する旨とともに、「センサア」〔GHQ検閲官〕から「マークされる」怖れがあるから、「左翼的な立場からの」用語の使用を控えた方がいい、と忠告する手紙を送っている〔1951.3.1付の日記の隣に手紙の実物が貼られている〕。『社会文藝』（1951年4月号）に発表された後、尹紫遠は小松清宅を訪ねて同作品を『中央公論』か『文芸』に転載するために助力を求め

たが、こちらは不首尾に終わった〈1952.1.21〉。「密告者」はその翌年、若干手が加えられて『文藝首都』20巻11月号（1952年11月）に転載された。

朝鮮戦争の続く1952年には、三編の小説が構想、執筆された。まず、年初には「ノスタルジイ」〔未発表〕〈1952.1.21〉の執筆に取りかかった。「気持ちがいいになりそうになる時がある。」「ノスタルジイ」を書くために、毎朝三時に起き、八時まで机に向う。八時半につとめに出、五時半帰宅。八時就寝。これがこのごろの生活である。六畳の間に子供二人、ふとんをしくと足の踏み場がない。しかもこの子供たちがうるさい。うらのモーターの音も激しい」〈1952.2.27〉。作品内容は不明であるが、執筆時の状況はこのようなものだった。二番目に取り組んだのは「十五年前の日記」〔未発表〕〈1952.9.16〉であるが、こちらは書き上げられなかった。三番目の作品は「行商人」〔未発表〕〈1952.12〉で、1949年の長男誕生前後を描いた自伝的小説である。その内容は、この頃につけていた日記の記述と一致する部分が多い。「行商人」はその後、1953年3月に「泥濘」〔未発表〕と改題された後、「人工栄養」（1954年）と「うぶごえ」（1959年、当初の題名は「産声」）の二つの作品へと発展したとみられる。

この頃の尹紫遠について特記すべきは、四歳年長の金素雲との交流である。『月陰山』刊行の頃に知り合ったとみられる金素雲は、「解放」を迎える前に朝鮮へと戻っていた。1947年7月、その元妻が東京にある尹紫遠宅を訪問する。尹紫遠はこの日本人女性の生活を支援しようと、金素雲の旧著の再刊に向けて動き、同年10月には岩波書店の編集者「長田氏」〔長田幹雄か〕に相談している。1951年には河出書房と話をつけ、作品選定と解説執筆まで済ませたが、刊行実現には至らなかった。

そのような折、1952年末にヴェネツィアで開催された国際ペン大会の帰路、金素雲が日本に立ち寄ることになった。日本の記者に韓国の現況について語ったところ、それが問題視され、金素雲は駐日韓国代表部に旅券を没収されて1965年頃まで日本に滞留することになる。尹紫遠は横浜港への出迎えから始まり、来日当初の身辺の世話をしたり、在日文化人たちに引き合わせ

たり、一緒に映画を観に行ったりと頻繁に行動を共にした。金素雲に関する記述は、1957年まで日記にみられる。その間に金素雲訳編『朝鮮詩集』が二度刊行された〔創元社、1953年と岩波書店、1954年〕。尹紫遠は金素雲の承認のもと、両方で「解説」を担当した。

1953年に入り、尹紫遠は次の小説「或る坑夫の話」〔未発表〕に着手した。これは1947年作の「嵐」の改作で、その3年後に『新日本文学』に発表された「朴根太の話」の原型とみられる。尹紫遠はこの頃、新日本文学会の会員となっていた。正確な加入時期は不明だが、日記では1953年から1957年まで、同会の会費納入や大会参加についての言及がなされている。

同年7月には、『新潮』の全国同人雑誌コンクール作品提出の通知を受け、「長安寺」に着手した〈1953.7.3〉。「長安寺」という題の小説については、1947年の日記にすでに言及がある〈1947.10.19〉が、この時初めて執筆したものとみられる。朝鮮への帰郷を歌った『月陰山』と同じ主題が扱われた。保高德蔵が『文藝首都』からの推薦として同作を新潮編集部に送ったが〈1953.11.3〉、同誌の「全国同人雑誌推薦小説特集」（『新潮』第50巻12号、1953年12月特大号）には掲載されなかった。それを知った保高は、落胆する尹紫遠に「新潮のあれは全く商業政策」だったと書き送っている〈1953.11.17〉。保高は、『新潮』に実際に掲載された12編の推薦作品に比べ、尹紫遠の作品に「商業」的な価値があるとみなされなかったと捉えていたのだろうか。この年には、「殴られた男」〔未発表〕〈1949.6.27, 1953.11.1〉という作品も完成させようとしたが、果せなかった。

翌1954年には、保高が約束した通り『文藝首都』に「長安寺」が掲載された。また、「人工栄養」が日本労働組合総評議会の機関紙『総評』で連載された。これは、長男誕生後まもなくの夫婦の生活を描いた作品である。その後、尹紫遠はこの作品を商業文芸誌へ掲載しようと、金達寿〈1955.2.16〉、中野重治〈1955.3.31〉、内山昭二〈1955.12.23〉、西野辰吉〈1956.2.24〉に原稿を直接持参したり、郵送したりして口利きを依頼したが、掲載は叶わなかった。

「密航者の群」の原型となった「密航船」〔未発表〕の執筆が開始されたのは、1954年末のこと

だった。尹紫遠は創作に専念するために自宅近くに別室を借り、クリーニング店で仕事の傍ら書き進めた。だが、仕事と執筆の両立はうまくいかず、数か月後に家に戻っている。この頃、「行商人」を改作した「産声」の原稿を古山登（1955.1.16）と小松清（1955.5.22）に見てもらっており、小松清から『新潮』編集部に原稿が渡ったが、同誌に掲載されることはなかった。なお、尹紫遠が『新潮』への掲載にこだわっていたのは、同じ朝鮮人作家の張赫宙が『嗚呼朝鮮』（1952年）や『遍歴の調書』（1954年）〔日本帰化後の名前である野口赫宙の名で刊行〕を新潮社から出版しており、自らの作品が受け入れられる余地があると期待したものと推測される。

1956年7月には、「朴根太の話」が『新日本文学』誌上に掲載された。その5か月前には、金素雲の紹介により講談社から小説集刊行の話が持ち上がっていた。「長安寺」、「密告者」、「産声」の三編を収録予定だったが、編集者の異動により頓挫してそれきりになった（1956.2.27, 3.7）。

家族が増え、生活が立ち行かなくなっていった尹紫遠は、1957年初めに自らのクリーニング店を構えた。それ以後は、多忙と疲労のため執筆に集中できなくなったようである。だがこの時期には、長らく発表媒体を見つけれずにいた旧稿を、在日朝鮮人発行の日本語媒体に掲載する機会を得た。

「産声」はひらがなの「うぶごえ」と改題され、1959年11月に『鶏林』に掲載された。1955年1月の脱稿から約5年後のことである。『鶏林』には、金達寿や張斗植ら旧『民主朝鮮』のメンバー、朴三文、徐鐘実、それに朝鮮戦争期に渡日した尹学準ら、主として総連文学運動の主流から外れつつあった人々が拠っていた。

尹紫遠は朝鮮国際タイムス社時代以来、後に総連や民団へ繋がる団体とは異なる立場に立った知識人たちとも近かった。1948年10月結成の朝鮮民主統一同志会に拠った高成浩、金容太、徐鐘実、黄甲性、彼らと近かった作家の康珪哲、そして中野重治の「雨の降る品川駅」（1929年作）にも登場する元プロレタリア作家の李北満等である。これらの人々に加え、韓国からの新規渡日者たちも、1950年代後半に新たに雑誌や新聞を立ち上げていた。

1954年末に着手された後、しばらく執筆を中断していた「密航船」は、友人で劇作家である押川昌一の勧めで続きが書かれた（1960.3.30）。「密航者の群」と改められたこの作品は、1960年に民族問題研究所編『コリア評論』誌上に連載された。同誌は、朝鮮半島の中立化による南北統一を唱えた金三奎〔1951年渡日〕が、1957年9月に創刊した雑誌である。だが、同誌の休刊のために連載は4回で中断し〔『コリア評論』はその後再刊し、1989年6月まで継続〕、康珪哲が編集長を務めていた『統一朝鮮新聞』がその連載を引き継いだ。同紙は、戦後に渡日した朝鮮人たちが中心となり、1959年に創刊されたばかりだった。連載中の1961年2月、尹紫遠は脳梗塞で倒れた。その一か月間の入院中に、尹紫遠は療養もそこそこに「密航者の群」を最終回まで書き上げた。

1961年4月には、韓国四・一九学生革命の一周年に合わせ、黄甲性を編集長として『統一評論』が創刊された。尹紫遠は朝鮮民話の連載を数回担当したが、1963年11月、同誌への寄稿を依頼した徐鐘実から、理由は不明ながら連載打ち切りを告げられている（1963.11.28）。

1957年以降は新作に取り組んでいなかった尹紫遠だったが、1963年10月に関東大震災を経験した朝鮮人男性と連絡が取れると、すぐに出向いて取材を行った。その体験談を元に、短編「憲兵の靴」を一か月ほどで書き上げ、新日本文学会の事務局長だった武井昭夫宛に原稿を郵送している（1963.12.17）。なお同作品は、1965年に未完の遺稿として『統一朝鮮新聞』に途中まで掲載された。

1964年7月、尹紫遠は再び病に倒れた。この時の入院でも尹紫遠は、小説執筆の好機とばかりに「創作慾」を燃やした。「或る船乗りの話」〔未発表〕（1964.7.18）の構想を練り、それを改題したと思しき「朝鮮戦争と私」〔未発表〕（1964.8.2-1964.8.22）という小説を病床で書き進めたが、完成させることなくこの世を去った。死の直前、尹紫遠はテープレコーダーにこの小説の原稿18枚分を録音した。密貿易船で蔚山から神戸、東京とやってきた朝鮮人男性が、朝鮮戦争勃発によって日本に足止めされ、妻子と離れ離れになる話がそこには吹き込まれている。

2. 移動する朝鮮人たちを記録する

在日一世作家たちの渡航物語はさまざまに書かれてきた。その中で尹紫遠が特異なのは、「解放」前後をまたぐ1940年代に何度も移動をし、自らや同胞たちの移動の経験も数多く作品化している点である。

尹紫遠とその兄弟たちの流浪の人生の始まりは、朝鮮総督府の土地調査事業で父親が蔚山の土地を失ったことに遡る。尹紫遠が10代後半の時に両親が死去すると、兄弟たちは旧満州や日本に散らばった。「解放」を迎えた後も、米ソ分割占領から朝鮮南北分断、朝鮮戦争へという政情不安定な状態が続いたことから兄弟が揃うことはほぼなかった。

尹紫遠の移動経路は、蔚山から横浜への渡航（1924年）、兄弟に会うための東京から慶尚道への一時帰郷（1940年）、徴用逃れのための東京から慶尚道を経て、兼二浦へ至る逃避行（1943、1944年）、兼二浦から蔚山、釜山方面への38度線南下（1945年11月頃）、蔚山から山口県への「密航」（1946年夏）である。「解放」後には、日本敗戦の結果として新たに引かれた二つの境界線、つまり北朝鮮／南朝鮮と朝鮮／日本の間を二つとも自らの足で越えるという、驚くべき経験をしていたのだった。

尹紫遠が書いた小説の作品時間は、「憲兵の靴」が扱う関東大震災の時期を除けば、すべて1940年から1950年頃までの10年ほどに集中している。だがその短い間に、作品の舞台は蔚山、釜山、金海、大邱、兼二浦、山口、東京など目まぐるしく移り変わる。

この節では、現時点で全文閲覧が可能な活字化された小説を、作品が扱う出来事が起きた順に整理してみたい。

「長安寺」（『文藝首都』第22巻1号、1954年1月）【1940年、東京から釜山、蔚山方面へ】

林光徳^{イムクワンドンク}が日本から植民地下の朝鮮へ帰郷し、父母の眠る望聖庵を兄の奉徳^{ボンドク}と連れ立って訪れる話。兄は故郷近くに新たに土地を買って父母の墓を建てようと意気込むが、「人生の迷い子（12頁）」であると思ひ悩む林光徳には、すべてが虚しく感じられる。植民地出身青年の悲哀

が、美しくも悲しい朝鮮の情景とともに描かれた。

「嵐」（『朝鮮文藝』第1号、1947年10月）、「朴根太の話」（『新日本文学』第11巻7号、1956年7月）【1945年9月～1946年5月、山口から金海、釜山方面へ】

「嵐」は1945年9月下旬に仙崎から釜山へ引揚げた七人家族の物語。GHQ／SCAPの検閲体制下で書かれた。1932年から山口県M炭鉱で働いていた朝鮮人の李萬植^{イマンシク}は、解放直後に意気揚々と帰郷したが、失業者で溢れる南朝鮮ではまともな仕事にもつげずにいる。そんなある日、空腹に耐えかねた長女が居候先の姉の家で白米を盗んでしまう。姉に口汚くなじられ、帰郷以来、溜めてきた鬱憤が爆発した萬植は、大雨にも構わず外に飛び出す。

その9年後の「朴根太の話」への改稿時には、全体の構成や登場人物の名前などさまざまに手直しされたが、最大の相違点は結末部分である。「嵐」では、外に飛び出した主人公がどうにか生き抜こうと決心するところで幕を閉じるのに対し、「朴根太の話」の主人公は、米軍の大型トラックに引かれ血を流しながら死ぬ。後者では、日本から米国へと朝鮮の支配者が取って代わり、今や米軍が日本人と朝鮮人の生殺与奪権を握っている事実が強調された。

両作品で描かれる「解放」後の混沌とした釜山とその近郊の様子や、食糧買い出し等の生々しい描写は、尹紫遠が38度線を越えた後に、実際に見聞きしたことを元に書かれたとみられる。

『三十八度線』（早川書房、1950年）【1945年11月、兼二浦から南朝鮮へ】

柳福樹^{ユフク}が妻の花順^{フアン}や兄家族などとともに、引かれたばかりの38度線を北から南へと越える道中を描いた長編。一行が死の危険に晒されながら越えていくのは、日本軍の武装解除を目的として、朝鮮「解放」と同時に米ソ軍の間で引かれた分割線である。兄弟はより「自由」であるように見え、また何よりも自分たちの故郷があることから、南下を選んだのだった。兼二浦での花順と夫の友人との恋愛が物語の横軸となり、縦軸である38度線越えに福樹の徴用逃れのための逃避行や、兼二浦での生活の回想が挿し

込まれる。旅の間中、福樹は年若い妻が占領軍兵士たちによって強姦されるのではないかという恐れを抱く。それは北でも南でも同じだった。

「密航者の群」（『コリア評論』1960年3月～1960年8月、『統一朝鮮新聞』1960年9月30日～1961年6月24日）【1946年夏、蔚山から山口へ】

1946年6月下旬に蔚山から山口県沿岸へと「密航」した、30数名の朝鮮人たちを描いた長編。主人公の安景俊は妻の甲順、そのいとこ、兄の友人である李奉善とともに密航船に乗り込んだ。だが、岸に到着する直前に警備団の村人に見つかり、「進駐軍」に検挙される。博多あるいは佐世保から南朝鮮へと送還するため、一行はまず下関に専用列車で送られる。そこには他地域からも朝鮮人たちが集められていた。約900人に膨れ上がった朝鮮人の一団の中からコレラ患者が発生するや、全員が仙崎に移送され、沿岸に浮かぶ米軍船で約一か月半隔離される。それらの船が送還準備のため佐世保に向けて出発する日の前夜、安景俊は船上で知り合った姜人沢という人物に妻を託し、李奉善と2人で岸へと泳いでいく。作者は安景俊と姜人沢という二人の人物に、自らの体験を投影している。

「人工栄養」（『総評』1954年5月～1954年9月）、「うぶごえ」（『鶏林』第5号、1959年11月）【1949年と1950年、東京】

両作品ともに、1949年から1950年にかけての東京を舞台に、李俊吉と蚩子という朝鮮人と日本人の夫婦の極貧生活が描写された。

「人工栄養」では、生後間もない子どもを抱えた夫婦のどん底の日々が描かれた。失業中の李俊吉が「パンパン」の女性たちに中古ストッキングを売り歩いている間、切羽詰まった蚩子は浜松町にある製薬会社に血液を売りに行く決心をする。だが、彼女の血は「甚だしい疲労をおびて」おり、それすらできなかった。一部始終を知って衝撃を受けた俊吉は、大事にしていた本を売って窮状を打開しようとする。作中では、黒人兵に対する白人兵の侮蔑的態度、民生館による朝鮮人への医療保護拒否など、朝鮮戦争勃発前夜の日本社会の様子も詳しく書き込まれた。

「うぶごえ」は、妻の出産予定日が迫るなか、

出産費用を捻出する算段もできずにいる李俊吉が、朝鮮へ帰る友人から預かった古本を売りに行く場面から始まる。失業中の俊吉は連日、在日朝鮮人詩人の詩集を同胞に売り歩いているが、全く収入を得ることができないでいる。そんなある夜、家で昼夜を問わず洋裁の内職をしていた蚩子が予定よりも早く産気づく。俊吉は蚩子を産院へ連れて行こうと、土砂降りの中を必死で駆け回る。

両作品とも国際結婚をした夫婦の生活が描かれるが、これは当時の在日朝鮮人作家が扱った主題としては極めて珍しい。当時の在日民族団体内では、日本人女性との結婚やその結果生まれた子どもについて表現することは忌避されていたからである。

「密告者」（『社会文藝』第3号、1951年4月）、「密告者」（『文藝首都』第20巻11号、1952年11月）【朝鮮戦争さなかの1950年頃、慶尚道】

蔚山郡と東萊郡の境の小さな村、仁星里に住む、元船乗りの男性を主人公とした短編。戦火を逃れて避難民が釜山へと南下していく光景が日常化する中、病身の母を抱えて身動きの取れない盧海相の生活は、困窮の一途を辿っている。そんなある日、4年ほど前の1946年大邱10月事件の際に派出所襲撃を行った安敏守が、村に戻ってきたのに出くわす。報奨金に目が眩んだ海相は警察に密告するが、安の同志たちに直ちに見つかり銃殺される。

『社会文藝』版から『文藝首都』版への改稿過程では、朝鮮民主主義人民共和国を批判する部分を追加し、南北のバランスをより取ろうとした形跡がみられる。

尹紫遠には、戦後／解放後も頻繁に日本と朝鮮を往来し、その後何らかの理由で韓国で捕えられ、1950年に処刑された弟がいたことが日記から読み取れる。「密告者」とこの弟との繋がりとは不明であるが、尹紫遠が戦争のさ中にも朝鮮の兄弟たちがもたらす情報にじかに接していたことが、この作品の成立に関わっているとみられる。

以上のように整理してみると、尹紫遠の作品執筆の順番と、作中の出来事が起きたそれが大きく異なっていることに気づく。たとえば、1945

年末の38度線越えについては早くも1946末に「終戦直後の兼二浦」として書き始めたが、日本への「密航」体験を元にした作品に着手したのはその8年後、作品を実際に発表したのは1960年、つまり14年後のことである。日本に居住する朝鮮人であり、しかも戦後日本への「密航」者であった尹紫遠には、その時々日本の政治状況の中で自らが書けることを選び取る必要が切実にあった。GHQ占領期には検閲下でどこまで書けるかを見極め、朝鮮戦争期には在日米軍による監視の目を意識しなければならなかった。これまで見てきた尹紫遠の執筆活動が、日本追放の恐怖と隣り合わせの状況下で行われていたことを改めて強調して、この節を閉じたい。

おわりに

私は、ひそかに短歌の世界に自分の生命の絶対値を求めようとした。これによって、打ちひしがれたやうな自分の魂に安住の地を与へようとした。狭量で、疑い深く、然かも何ものかにおびえて、常におどしている自分の魂の済度を見出そうとした。

（「巻末記」『月陰山』、2頁）

「自分の魂」を救う手段としての短歌への情熱は、「解放」後にはあっさりと消え去った。日記にも、短歌に関する記述はただの一行もない。桑原武夫が「第二芸術」として短詩型文学を批判したのは1946年11月のことだが、敗戦後の日本人読者たちが、日本の伝統文化を体得しようとする殊勝な植民地出身者をもはや必要としないことを、尹紫遠は素早く察知したのかもしれない。支配者の交代や国家の再編成に伴い引き直された境界を自ら越えるという経験をし、それを朝鮮人たちの集団の記憶として留めようとした1945年8月以後の尹紫遠には、短詩型文学が窮屈になったということもあるだろう。

南北の国家に対して一貫してバランスを取ろうとした尹紫遠の立ち位置も、彼の戦後／解放後の越境と切り離して考えることはできないだろう。尹紫遠は米ソ間の朝鮮分割占領の現実をその目で見、その両方に幻滅した。そのことが、その後樹立された南北二つの国家の枠組み

自体を拒むような彼の態度に繋がっていることは、想像に難くない。尹紫遠は、ある程度のシンパシーを持ちながらも、北を支持する総連が中心となった在日文学運動には深くコミットしなかった。その代わり、日本の商業文芸誌に掲載してもらうために、——おそらく惨めな思いを押し殺しながら——日本人作家や評論家に紹介を頼んで回らなければならなかった。しかし興味深いことに、日本の文壇での成功を望んだわりには、尹紫遠は日本人読者に受ける作品を書こうとは意識していなかったようにみえる。以下は、病に倒れる直前に最後に自宅で書いた日記の一節である。この日は、「密航者の群」の単行本化をある人物に依頼した日でもあった。

今までは、自分の書く物を通して、自分の言うべきことが確立していなかった。つまり、自分は何を言おうとして小説を書いたのか？そのへんが実にあやふやだった。そのことに初めて気がついた。ばかばかしい話だが、自分にとっては全く新しい発見だ。（1964.7.5）

貧困、家庭内の問題、家族離散などと格闘しながら、朝鮮人作家として報われることの少ない創作活動を20年あまりにわたって続けた末のこの告白は、読む者をしばし啞然とさせる。だが、尹紫遠文学の本質は、まさにこのような計算のなさに宿っているように思われる。当時の日本では、朝鮮ナショナリズムを体現する抵抗者の像を描くことが、朝鮮人作家に期待されていた。実際、1950年代に在日朝鮮人の日本語作家たち——朝鮮語作家たちの世界ではまた事情が異なった——が造形したのは、朴達〔金達寿「朴達の裁判」〕、でんぼう爺や朴書房〔金石範「鴉の死」、「看守朴書房」〕のようなたくましい民衆、あるいはジュヌアとその家族〔許南麒「火繩銃の歌」〕のような、植民地主義や帝国主義に命がけで抵抗する人々であった。そのような敗戦後日本の空気の中で、そこから程遠い人々の姿を描き続けることに明確な意義を見出すことは、尹紫遠自身にとっても難しかったのかもしれない。

尹紫遠が写し取ろうとしたのは、支配者たちが新たに引いた境界を越えるほかない状況に追

い込まれた、しかも越えた先にも不幸しか待ち構えていないような、歴史に翻弄される朝鮮人たちだった。植民地支配下から冷戦体制下へという、朝鮮のシームレスな移行を象徴する人々でもある。それらの声なき人々の集団的な経験を文字に刻むこと。それが自らの使命だということを、1946年の東京でだしぬけに小説の執筆を始めた時点から、尹紫遠は信じて疑わなかったようにみえる。

日記からは、尹紫遠の作品のほとんどが自らや周囲の人々の体験をもとにしたものだということが分かる。切り貼りしたり継ぎ足したりというフィクション化の作業が多少行われてはいるが、尹紫遠はそれらの人々の経験を、あまり手を加えることなく素朴に書き留めた。「尹さんの小説技法は未だ甚だ巧妙であるとは言いがたい。又、そのセンスは、いくらか古い」（『序『三十八度線』について』、Ⅱ頁）。これは、三好十郎が1950年刊の『三十八度線』の序に記した文章だが、的を射た指摘であろう。だが、これに続く以下のような言葉もまた、小説家・尹紫遠の核心をよく突いているのではないだろうか。

しかしそれが何であろう？ そんな事は実はどうでもよい事だ。尹さんは一人のすぐれた作家としての性質を全部持って言える。と私は見る。先ずそれは彼の、時によって愚直といえる位の誠実さである。次に朝鮮民族全体の運命の起伏に強くつながって、民族全体の悲喜を即ち自己の悲喜として鼓動している彼の魂のパトスである。

1953年1月、尹紫遠は次のように日記につづった。クラーク国連軍司令官とマーフィー駐日米国大使の招待で来日していた李承晩が、戦争の続く朝鮮へ戻っていった日のことである。

おれの創作の内容は尹紫遠個人の物であってはならない。少なくとも朝鮮人の代弁者でなくてはならない。〈1953.1.7〉

植民地支配が生んだ朝鮮人歌人は、戦後日本で小説家へと転身した。そこには、「自分の魂」の救済から「朝鮮民族全体の運命」の描出というテーマの移行が、はっきりと見てとれる。

“戦後文学”に連なりそこねたその小説群は、朝鮮／日本、南／北という第二次世界大戦後に出現した二つの境界上に、今なおひっそりと佇んでいる。

*本論文はJSPS科研費20K00533の助成を受けたものである。